

はじめての

# 万葉集

[vol.73]

日本に現存する  
最古の和歌集「万葉集」を  
わかりやすくご紹介します



## ますらをを

舎人皇子(親王)は天武天皇の子で、『日本書紀』の最終的な編纂責任者と目されている人物です。今から一三〇〇年前の養老四(七二〇)年五月二十一日、舎人親王が「日本紀」を修んだという記述が



## 大夫や片恋ひせむと嘆けども 醜の大夫なほ恋ひにけり

舎人皇子 卷二 (二一七番歌)

訳

りっぱな男子たるものが片恋などしようかと思ひ、わが身を嘆くのだが、やはりふがいない男子は恋に苦しんでしまうのでしょね。

『続日本紀』にあり、これが『日本書紀』が完成し奏上されたことを意味しているとされています。

さて、今回ご紹介する歌は、その

舎人皇子が、立派な男子たる「ますらを」が片恋に悩んだりするものかと嘆きながら、それでもやはり「醜のますらを」は恋に苦しんでしまふ、と歌ったものです。この歌には、舎人皇子が応じた歌もあります(巻二・一一八)。

嘆きつつ 大夫の恋ふれこそ

わが髪結の漬ぢてぬれけれ

(思わず嘆きながら「ますらを」たるものが恋してくださるからこそ、私の髪の結い糸も濡れて解けるのですね。)

ここでは、立派な「ますらを」が恋してくれるからこそ、私の髪も濡れほどけてしまうのだと、皇子の少しおどけた嘆きを肯定的に捉え直し、機知に富んだ返しをして

います。髪が濡れほどけることについては、恋されると髪がほどけるといふ俗信があったとも、相手の恋の嘆きが霧となつて髪を濡らしほどけさせるといふ考えがあったともいわれます。

皇子と娘が詠んだ「ますらを」、つまり古代の立派な男性像については、『日本書紀』にも見えます。神武天皇の兄である五瀬命は、傷を負つて亡くなる前に、「大丈夫」であるのに傷の報復もせず死んでしまうとは、と発言しています。男とはこうあるものだ、といった男性像があつたようです。

自らを「醜のますらを」とおどけた皇子は、この歌を詠んだ時にはまだ若かつたと思われませんが、後に『日本書紀』編纂を統括するといふ大きな業績を成し遂げた「ますらを」となるのです。

(本文 万葉文化館 吉原啓)

## 松尾寺

(大和郡山市)

松尾丘陵の南端にある松尾山の中腹に位置します。天武天皇の皇子・舎人親王が、『日本書紀』の無事完成と自身の厄除けを願つて建立したとされ、現存する厄除霊場としては日本最古といわれています。



☎0743-53-5023 FAX0743-53-5022  
所大和郡山市山田町683 🌐matsuodera.com/

🗨️県広報広聴課 ☎0742-27-8326 FAX0742-22-6904

万葉ちゃんの

## つぶやき

和歌に関連するものを紹介するよ!



万葉ちゃん